

アルタイ山脈のユキヒョウとモンゴル遊牧民

― 生態観察、獣害対策、民俗伝承の複合型生物誌の研究 ―

早稲田大学 高等研究所 助教

相馬 拓也

キーワード：ユキヒョウ、ムンフハイルハン山、獣害対策、希少動物保護、保全生態観

Keywords : Snow Leopard, Mt. Munkh Khaikhan, Vermin Control, Rare Animal Preservation, Ecological Conservation

1. はじめに

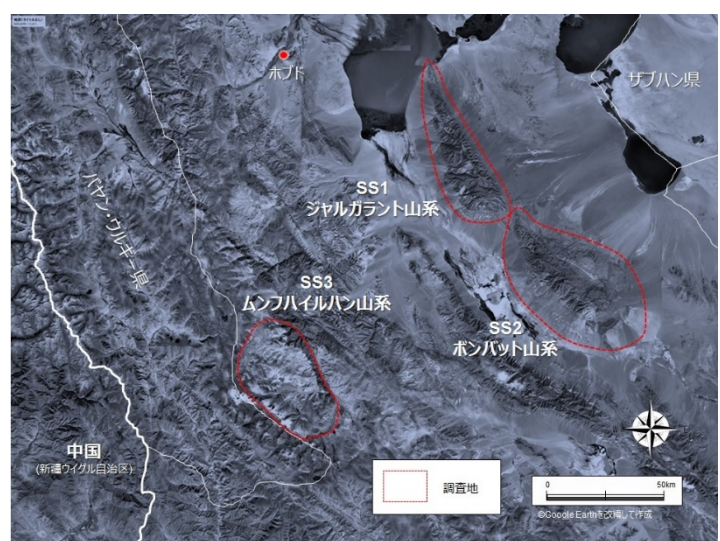
モンゴル国には現在でも、西部地域を中心に 500～1,000 頭のユキヒョウ *Panthera uncia* (地図 1) が生息すると推測される。かつては「山の亡霊」と畏れられ、地域の遊牧民はその存在に畏怖を抱き、毛皮のために積極的に捕獲したり、棲息環境を攪乱することは控えられてきた。そして長年ユキヒョウの棲息圏内に暮らした遊牧民でも、その姿を目にしたことのない人物は多い。ユキヒョウの棲息圏は、中央アジアの山岳地帯に広がり、その棲息国は 9 カ国(モンゴル、カザフスタン、キルギス、中国、タジキスタン、アフガニスタン、ネパール、ブータン、パキスタン)にまたがっている。しかし、すべての個体数は約 4,500～7,500 頭、モンゴル国内では 500～1,000 頭と推定されている。世界自然保護連合(IUCN)の Red List では

絶滅危惧 IB 類に登録されている。モンゴル国内法でも、1995 年成立の狩猟法により、狩猟および毛皮、その他全ての器官の取引が禁止されている[坂口 2009]^[1]。

しかし、ユキヒョウによる遊牧民の家畜被害が 2013 年以降急増し、住民感情はユキヒョウを害獣とみなす風潮が生じている。ユキヒョウの保護は 1980 年代から続く、世界自然保護基金(WWF)やモンゴル政府による長い保護の歴史がある。集中的な保護による個体数の安定とあいまって 1990 年代以降、ユキヒョウの生態行動にも変化が現れつつある。人間を恐れなくなり、頻繁に人前に姿を現し、家畜を襲うようにもなった。こうしたユキヒョウ関連事故(目撃例、遭遇事故、家畜の襲撃被害)は 2010 年頃から急激に増加している。家畜被害のなかでも、宿营地まで来て家畜を襲う例が多数発生している。そのため、国内法でユキヒョウ狩りが完全に禁止され



地図 1 ユキヒョウ棲息圏の地図



地図 2 主要調査地の地図

た 1995 年以降にも、家畜防衛のため遊牧民による私的なユキヒョウ駆除が複数発生している。このように、ユキヒョウと遊牧民のあいだにはかつてないほどの緊張関係が広がっている。

2. 対象と方法

こうした現状を踏まえ本調査研究では、ユキヒョウと遊牧民の共生関係の構築に向けた、あたらしい保全生態の試みを模索する。調査は以下の 3 領域を統合した「複合型生物誌」の調査研究を展開する^{[2][3][4]}。

- R₁. アルタイ山脈に生息するユキヒョウの生態行動の観察
- R₂. 遊牧民の家畜被害の現状と獣害対策
- R₃. 古来の伝承・逸話などのユキヒョウ民俗の調査

臨地調査は 2016 年 8 月より、モンゴル国西端のホブド県で本格的なフィールドワークを開始した(地図 2)。インタビュー調査については、同県のチャンドマニ郡、ムンフハイルハン郡、ゼレグ郡、マンハン郡の 4 ヲ村で実施した。同地のユキヒョウ棲息山地①ジャルガラント山地、②ボンバット山地、③ムンフハイルハン山地の周辺で、ユキヒョウ棲息圏内に暮らす遊牧民 105 世帯を選定し、構成的インタビューを実施した。上記 3 地点に生息するユキヒョウは、合計約 70～90 頭前後と推測される。

3. 結果及び考察

R₁. 生態行動の観察調査

ユキヒョウの生態行動については、2015 年からムンフハイルハン山地域でユキヒョウ撮影用のトラップカメラを設置し、これまで 200 枚を超える生体の撮影に成功した。これによりモンゴル隊とともに成獣およそ 13 個体＋幼獣 4～5 個体の存在を特定した(図 2～5)。現在は 10 個のトラップカメラが稼働中であり、撮影地点での個体識別や出現頻度などから行動範囲とその特性を調査中である。2017 年 7 月からは、ドローンをを用いた個体の探索や生態観察の試みを行っている。

R₂. ユキヒョウの目撃・遭遇事故

遊牧民の家畜被害の現状と獣害対策については、目撃・遭遇事故、家畜被害などについて住民への聞き取り(遡及調査)を実施した。実地調査では、遡及調査法により「目撃事例」180 件、「遭遇事故」53 件、を特定した。この数値を参照すると、「ユキヒョウ関連事故」は 2013 年頃を境に急増している(図 6)。

とく岩場で採食するヤギと、高山帯へ食草に赴く馬(満年齢 1 歳頃まで)が多数犠牲となっている。ユキヒョウは高山帯や岩山の放牧地で食草するヤギ、また馬を好んで襲っている(図 3)。2000 年以降で特定できた馬の襲撃被害 104 頭のうち 89 頭が死亡、15 頭が生存している。ユキヒョウの襲撃からの生存率は 14.4%と低い。その場で即死しなくとも、当日～20 日間以内に傷が原因で死亡している。死亡した馬で年齢が特定できた 25 件の平均年齢は 1.04 歳(満年齢)で、そのうち 14 件が 1 歳未満の仔馬であった。若年の馬が犠牲となりやすい状況にある。またヤクなどの大家畜も犠牲となるが、とくに満 2 歳齢以下が捕獲対象となる。被害事例では、宿营地(ホト)付近まで来て家畜を襲った例も 23 件確認された。時期の特定できた 22 件のうち、18 件が 2010 年以降で、とくに 2015 年 8 件、2016 年 8 件とほとんどが最近 2 年以内に発生している。

これは冬季の寒害(ゾド)の発生(とくに 2009/10 年)と連動していると推測される。地域の植生に依存するアイベックスやアルガリなど、ユキヒョウの潜在的な捕獲対象がこの災害により多数死亡したことで食餌確保の環境悪化が背景にあると思われる。事故の発生状況をみると、「日帰り放牧中」が 38.5%と最も高く、次に馬群や牛などの「大家畜の見回り」が 34.4%と高い。とくに夏季は家畜が採食活動で高所へ赴くため、その見回りの途中でユキヒョウとの目撃・遭遇頻度が高くなると考えられる。「高所への放牧」「見回り」「狩猟」など、遊牧民の生活と切り離せない日常の活動での割合が 82.8%となっている。



図 1 カメラトラップ法により撮影したユキヒョウの成獣♂



図 2 兄弟と思われる複数等の撮影事例



図 3 日中のマーキングの風景



図 4 ユキヒョウの歩行路、活動圏では、多数の野生動物も確認される

こうした現状は *National Geographic* によっても世界に広く伝えられている[Holland 2015]^[5]。たとえば 2012 年成立の「生態法」では、メスの成獣を殺すと少なくとも 13,000,000MNT(約 78 万円)の罰金と懲役刑が科される[環境保全局の内部資料を参照]。それでも実際には、地域居住者により私的に駆除される事件があとを絶たない。

R3. ユキヒョウ民俗の逸話・オーラルヒストリー

民俗調査では地域の古老・長老を訪問し、オーラルヒストリーや口承伝達、ハンターのライフコースと狩猟体験について集中的なドキュメンテーションを実施した。得られた民間伝承は、ユキヒョウの I. 生態伝承、II. 狩猟体験、III. 儀礼、IV. 食肉習慣、のカテゴリーに分類し、整理・検討を行った。I. 生態伝承は 72 件、II. 狩猟伝承は 22 件が確認された。これらには古老やハンターによる実際の狩猟体験を含む。多くの地元遊牧民がユキヒョウを畏れているが、実際にはユキヒョウの対人攻撃性は低く、自身から人間に襲いかかってくることはほとんどない。現地居住者 117 名から、本人体験だけでなく伝聞をさかのぼって聴いても、実際に人間が襲われたというオーラルヒストリーは 1 件も聞かれなかった。

「III. ユキヒョウの儀礼」では、とくにユキヒョウを狩猟などで殺した際に執り行われた「ユキヒョウ送りの儀」について 15 件が確認された。この儀礼には、ユキヒョウが遊牧民の聖性・禁制の双方を複合する野生界の象徴としての存在がよく表れている。かつてユキヒョウを殺すと「呪い」「たたり」「ハル・モルテイ(黒い足跡)」に見舞われるとして、これを回避するために「ユキヒョウ送りの儀」も執り行われた。以下に代表的な送りの手順を要約した。

はじめに死んだユキヒョウの横たわった形を地面に線で縁取る。
それから、ユキヒョウを円で囲むように丸く線を地面に描き、人ひとりが通れるスペースを残しておく。狩猟者はその縁の内、4 本

すべての肉球に切れ込みを入れ、足裏の毛を燃やす。その後、狩猟者は線のひかれていない「とびら」からユキヒョウに背を向けずに後ろ向きで円の外に歩み出て、その隙間に線を引いて完全な円でユキヒョウの遺体を囲む。

これは、ユキヒョウが自然界にまだ健全であり、人間によって狩猟されてはいないのだ、ということを表していると考えられる。ユキヒョウ殺しに由来する「呪い」「たたり」への畏怖は広く共有され、モンゴル語では「ハル・モルテイ(黒い足跡)」と表現される。肉球を切り血を流すことで、「赤い足跡」としてたたりを回避するための儀式とされる。

また「IV. 食肉習慣」では「ユキヒョウ肉の薬効」について 18 件が確認された。地域のシャマンによるとユキヒョウ肉は 72 種類の病気に効果があるといわれている。とくにもっとも多く聞かれた薬効として、子供に食べさせると「はしか」「水ぼうそう」の予防になると信じられていた。しかし、ムンフハイルハン地域以外でこうした食習慣や伝承は聞かれなかった。その一例に、かつてユキヒョウの肉には 72 種類の病気に効果があり、とくに子どもにあたえたと一生「麻疹」にならないと信じられていた。

ユキヒョウは希少動物であるばかりではなく、遊牧民特有の環境共生観や、分厚い文化的積層をもその背後に宿している。本調査はユキヒョウの生態観察だけでなく、家畜被害に動揺する遊牧民の感情や対応の変遷を追跡し、コミュニティが培ってきた民俗伝承など世界的にも新しい知見の回収を目的としている。これまでのユキヒョウ研究に「複合型生物誌」の手法により新たな視点の醸成が期待される。

4. おわりに

生存空間のオーバーラップをめぐるユキヒョウと西部モンゴル遊牧民のあいだには多彩かつ深みのある分厚い文化的積層がみられる。かつて遊牧民は、ユキヒョウによる家畜被害を「自然への返礼」とする、自然災害と似た環境観があった。そして「ユキヒョウ送りの儀」は、地元遊牧民によるユキヒョウの忌避と保全生態観をよく表している。しかし、こうした環境共生観は廃れ、現在は私的な駆除としてその関係性の改善は緊急性を要している。さらにユキヒョウ生息圏に在住する遊牧民のあいだには、「政府によるユキヒョウ被害対策への遅れ」や、「家畜被害に対する補償制度の不在」などの不満が募っている。とくに放牧地を保護地に指定されることへの警戒感や強制移動への不満が噴出している。

しかし、ユキヒョウによる家畜被害の増加は、遊牧民自身の生活態度と環境配慮の欠如、例えば(PR1) タルバガンの乱獲、(PR2)

図6 ユキヒョウ関連事故(目撃・遭遇・家畜被害)件数の推移
[1980~2015年]

家畜の過大所有と過放牧、(PR3) 家畜防衛の怠り、などに起因する可能性もある。いわば遊牧民自身も、家畜をユキヒョウから守る努力を怠っている側面は否めない。モンゴルの遊牧民にはかつて、自然のバランスが崩れれば必ず自分たちの生活に跳ね返ってくることを理解しながら、その環境共生観／保全生態観を伝承や戒めとともに受け継いできた。物質面、資金面、制度面等のあらゆる側面で依存体質の現代のモンゴル遊牧民には、能動的な家畜防衛という遊牧活動の原点と自己研鑽こそが、今後のユキヒョウと遊牧民にとっての望ましい未来を確立するように思われる。

- [1] 阪口法明. 2009. OECC 会報 57 号: p. 10.
- [2] 相馬拓也 2017a. アルタイ山脈のユキヒョウ *Panthera uncia* をめぐる保全生態の試み—生態観察・獣害対策・伝承知の複合型生物誌の展開から、ヒトと動物の関係学会第 23 回学術大会(抄録): 26.
- [3] 相馬拓也 2017b. ユキヒョウとモンゴル遊牧民—アルタイ山脈における目撃・遭遇事故と家畜被害をめぐる地域社会の葛藤. 日本地理学会 2016 年度春季学術大会(抄録) Session ID: 704.
- [4] 相馬拓也 2017c. ユキヒョウの民俗学—希少動物との共存をめぐる西部モンゴル遊牧民の民間伝承. 日本文化人類学会 2017 年度学術大会 抄録: 77.
- [5] Holland, Hereward. 2015. 「絶滅危惧種ユキヒョウを脅かす気候変動と遊牧民」『ナショナル・ジオグラフィック』2015 年 12 月号

[文責: 相馬拓也]